



出御される沖津宮御神璽

# 沖津宮御神璽迎え



# 宗 像

## 10月祭事暦

秋季大祭(1~3日)

毎月15日 <sup>つきなみ</sup>月次祭

午前10時  
高宮祭  
第二宮・第三宮祭  
引き続き  
宗像護国神社  
巡 拜

午前11時~  
総社祭  
豊栄舞奉奏

17日 表千家献茶祭

午前11時~

十月一日みあれ祭に先立ち、九月九日玄界灘の孤島に鎮座される沖津宮の御神璽をお迎えする沖津宮神迎え神事が厳肅に斎行された。

前日の九月八日、高向権宮司以下神職三名が大島へ渡島し午後五時より明日の渡航安全祈願祭が斎行された。

翌日早朝、御座船となる「威徳丸」(船長・丸井健一氏)には、みあれ祭御座船と同様の「国家鎮護」の大幟、「御長手」と呼ばれる紅白の吹流しが掲げられ、船首に「波切り御幣」をつけ御神璽をお迎えする準備が整った。

午前六時、高向権宮司以下神職三名、沖・中両宮奉賛会古賀理会長以下会員・沖中両宮翼賛会福岡延男会長、宗像漁協山口國一組合長他総勢十名にて大島港を出港。薄曇の天候であったが海上は風、同八時無事沖ノ島へ到着し



10月1日に行われた「みあれ祭」



出港前の沖津宮神迎え御座船

神社の例祭や結婚式などの神事の中で演奏される音楽の事を、雅楽、神楽という。それぞれ楽器の演奏のみを行う場合と歌や舞を伴う場合がある▼神楽とは、神話の中で、天の岩屋戸の前で天鈿女命が舞った歌舞を起源とするもので、神遊とも言われる▼神楽は宮中で行う御神楽と、里神楽に大別され、神社で巫女が舞うのは里神楽である▼雅楽とは、中国大陸や朝鮮半島において、祭祀などの儀礼に用いられた楽曲が、奈良時代に日本に伝わったもので、平安時代には、演奏形式や楽曲が日本風に整理され、現在の雅楽に近いものになった。その後、専属の楽人を養成する社寺により、一般でも演奏されるようになる▼雅楽が継承されているのは我国だけである。外来の文化を昇華し、伝統文化へと成熟させ今日に至っている。同時期の「正倉院御物」同様、先人の偉業を連綿と受け継ぐ、そこに日本人の感性があり民族の魂が宿る。我々神職もこの意義を充分に踏まえ、奏楽に日々の研鑽に励んでいる。

(T・S)



### 神具・装束 結婚式場調度品



福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31  
電話 福岡(092)651-9456番  
本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入  
電話 (075)341-3341(代)~4番  
(075)343-3341番

### 木組の家 匠の技

総合建築業 株式会社 弘江組

〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567



た。  
到着後、直ちに海中にて禊をし、沖津宮本殿にて出御祭が斎行された。神職が御神璽を捧持し、御祓いをしながら参道を下り御座船「威徳丸」に奉安、一行は再び大島中津宮へ向かった。  
午前十一時半、大島へ到着すると多くの島民が沖津宮の神様を波止場でお迎えした。着岸すると大島駐在のパトカーに先導頂き中津宮迄御神幸、同宮本殿で入御祭が斎行され、本年度の沖津宮神迎え神事は滞り無く終了した。



尚、中津宮本殿内陣に仮鎮座された沖津宮御神璽は、中津宮の御神璽と共に十月一日海上神幸され、お迎えされる辺津宮御神璽と年に一度の再会を果され、総社・辺津宮内陣に三宮の御神璽が奉祀される。



第9回 出光興産(株)中堅社員研修実施

出光興産株式会社  
人事部教育課

九月七〜九日までの二泊三日、第九回中堅社員研修・宗像大社研修を実施させていただきました。弊社の中堅社員研修は約二週間の研修期間の、冒頭二泊三日を宗像大社での研修としております。

前日から関東地方に接近中の台風九号の影響で、研修生が時間通り集合できるか危惧されましたが、集合時間の午前十時には三十五名全員が揃い、予定通り研修を開始することができました。

研修開始にあたり、辺津宮拜殿にて研修開始奉告祭を執り行い、御神前に研修の開始を奉告し、中堅社員研修が実り多き研修となるよう祈願致しました。

約二週間という長期に亘って職場を離れるため、前日ギリギリまで残務や引継ぎに慌しかった研修生も多くおりましたが、大社の荘厳さを肌で感じ、気分を入れ替え研修に臨むことができました。



白衣・白袴に着装しての祭式の講義

白衣・白袴に着替え、神社祭式作法の習得に取り組みました。慣れない着付けや作法のため大変苦労しておりましたが、一通り習得した後は「今後、お宮参りや地鎮祭など神事に出席する際にも自信をもって臨むことができる」との感想が多くあり、貴重な体験をさせていただくことができました。

前回から日程に取り入れていただきました神職の方々と懇談では、神道や宗像大社

のことについては勿論のこと、神職の方の日常生活など普段知ることができない様々な話をお聞きすることができ、大変参考になりました。神職の皆様にはお忙しいところご出席いただき、誠に有難うございました。

二日目には高向権宮司より宗像大社の御由緒説明と、重住学芸員より神宝館史料の解

説をいただきました。宗像大社のご祭神が天照大神からお生まれになった大変貴い神様であること、古代より沖ノ島は大陸との往来において交通の要衝にあたり、我が国の歴史を語る上で不可欠な存在であることを知り、弊社創業者の出光佐三が宗像大社を大切にされたかについて良く理解できました。

にお住まいの方は今もなお中津宮を中心として地域一体となつて生活を営んでおられるとのこと、神社を中心としてコミニティを形成していた私どもの祖先に思いを馳せるとともに、地域の絆の素晴らしさを感じさせられました。また、沖津宮遥拝所並びに御獄山山頂からは、この季節としては珍しく彼方に沖ノ島を仰ぎ見ることができ、大変幸運でした。

日・二日目と二回実施させていただきました。普段、椅子での生活に慣れきっている研修生の中には正座が辛く、「とても魂を鎮める境地には至らなかった」との感想も聞かれましたが、最初の五分程度は暗闇の中で虫の音や木々のざわめきを感じながら清々しい気持ちを感じながらおりました。この高宮での鎮魂は、いつまでも心の中に残るものと思われま

ります。最後にりましたが、宗像大社の皆様のご繁栄をお祈りしまして、お礼のご挨拶とさせていただきます。有難うございました。



高宮で大祓詞を奉



中原権清宣による中津宮の御由緒説明



神職との班別討議



大島では遙か沖ノ島が見えました



神島宮司の開会挨拶



沖人事部次長の挨拶

午後からは大島に渡り、中津宮を正式参拝させていただきました。大島

さて、毎回研修生にとって一番の思い出になるのが、午後七時半からの高宮で行う鎮魂です。今回の研修では、初

二泊三日の宗像大社研修も最終日朝の研修修了奉告祭で全日程を終了し、神職・職員の皆様にお見送りをいただきました。

期間中、宗像大社の皆様には物心ともに多大なるご支援を賜りました。今後は、非日常の宗像大社研修を糧に仕事において、さらに切磋琢磨し、社会に示唆を与えられるような存在となるよう努めて参る所存であります。

第三十一回東西神社人野球大会を福岡で開催  
 太宰府・宗像合同チームが初優勝



当大社も昨年より太宰府天満宮との合同チームで参戦している東西神社人野球大会が、八月二十〇、二十一日、二十二日初めて九州・福岡で、当大社・太宰府天満宮の当番により開催された。

初日の二十日、全国から博多に約一八〇名の神社関係者が集い、ホテル日航福岡で歓迎会が催され、大会副委員長(宗像大社)の長(神島宮司)の開会の辞、大会委員長の西高辻宮司(太宰府天満宮)の歓迎挨拶の後、生田

神社の加藤宮司の乾杯で開宴した。宴の中盤、組み合わせ抽選が行われ、翌日の野球大会での対戦チームが決まると各チームから歓声が沸き起っていた。その後、太宰府天満宮で正月七日に行われる「鷲替え神事」を会場で再現。会場全員で「木鷲(きうそ)」を交換し合い、九州の様々な特産品との交換がなされると会場は笑顔に包まれた。



翌二十一日、小郡市の小郡運動公園野球場で開会式が行われ、その後同球場と大野城市の大野城総合公園野球場の二会場で、トーナメント方式により熱戦が繰り広げられた。当大社からは、大塚(投手・一塁手)・長友(遊撃手)・壱岐権禰宜(外野手)、吉野出仕(捕手)、吉武実習生(外野手)の五名が試合に出場。



初戦は昨年の初戦と同じく出雲・金比羅チームと対戦。エースで四番、合同チームの大黒柱である神島弟(太)が先発。序盤から投手戦となったが、大塚(宗)の二点適時打で先制、続いて四番神島弟のヒットで

大塚がホームを踏み、三点を先制した。しかし得点はこの三点のみ、先発の神島弟が踏ん張り相手に流れを渡さず、三対〇で完封勝利した。続く、二戦目は東京チームと対戦。大塚・吉野(宗)の宗像バッテリーで臨んだが、立ち上がりからピリツとせず、味方の好プレーや相手ミスに助けられながら何とか踏ん張っていた。すると壱岐(宗)がヒットで出塁、そのまま俊足を

飛ばし二盗、吉野(宗)の適時打で一点を先制した。しかし、バッテリーミスから逆転を許し、チーム内にも昨年決勝の悪夢が蘇りつつあったが、開催地チームとして今年にかける気持ちがチームを一丸とし、その裏満塁で壱岐が適時打、吉野の犠牲フライ、神島兄(太)の適時打と、下位打線が突破口となり一挙に四点をもぎ取った。その後は大塚も立ち直り、四回以降キ



ツチリと三者凡退で抑え、五対二で接戦をものにした。決勝は、昨年と同じく兵庫チームと対戦。すでに三位、五位決定戦も終了し、全ての参加者が見守る中、緊迫した試合展開となった。

制、その後も三回に死球で出塁した長友(宗)が神島弟の犠飛で生還、四回にも死球で出塁した壱岐が相手バッテリーのミスで生還、着実に追加点を奪っていった。

一方、先発した神島弟は兵庫の強力打線に対し、ヒット四本を打たれながらも要所を締め二点に抑える粘り強い投球を披露した。

終わってみれば、太宰府・宗像チームはヒット一本で四点、兵庫チームはヒット四本を打ちながら二点に留まり、昨年の対戦と逆の展開で太宰府・宗像チームが参戦二年目で初優勝を果たした。

MVPには、投打にわたる活躍をみせた神島弟(太)が選ばれた。

三日目の二十二日は太宰府天満宮を正式参拝後、九州国立博物館を見学、全国からの参加者は、来年東京・神宮球場での再会を誓い、福岡を後にした。

結果は左記の通り

- 優勝** 太宰府・宗像チーム
  - 準優勝** 兵庫チーム
  - 三位** 熱田チーム
  - 四位** 東京チーム
  - 五位** 出雲・金比羅チーム
  - 六位** 神宮チーム
  - 最優秀選手** 神島 崇 (太宰府天満宮)
  - 優秀選手** 大塚宗延 (宗像大社)
- 他、各チームより一名づつ選出

## 第37回 西日本菊花大会のご案内

神郡宗像に菊の季節が到来しました。九州各県を中心に、全国の菊花愛好家が丹精込めて作り上げた銘花約3000鉢が、境内中に展示されます。この大会の最高賞は内閣総理大臣賞、この他に大臣賞が十一本授与され、別名「菊作り九州ナンバーワン決戦大会」とも呼ばれています。

期間中は、観菊者、七五三詣での家族連れなどで賑います。また菊苗・菊鉢の販売、勅使館をこの時期限定で特別に開放「抹茶コーナー」、豪華景品が当たる『菊みくじ』、宗像観光協会の運営する『いっぴく茶屋』なども開かれています。

是非、御参拝下さいますよう御案内申し上げます。



- 期間** 11月1日(木)~11月23日(金)
- 時間** 終日
- 会場** 宗像大社境内
- 表彰式** 11月18日 午前10時~  
於=ゆうゆうプラザ
- 拝観料** 無料
- 駐車場** 無料



# 平成19年度学芸員実習

八月十六〜二十六日まで、当大社文化財管理事務局が中心となり学芸員実習が実施した。この実習は学芸員資格取得を目指している大学生を対象に毎年実施しており、今年は県内外の学生計八名が受講した。

実習は毎朝齋行している朝拝式への参列から始まる。連日、学生は当大社職員とともに玉串拝礼を行い、心身を清めて各講義に臨んだ。実習の内容は、講義として堤文化財管理事務局長の講話のほか



刀の手入れ実習

か、沖ノ島祭祀と出土品について学ぶ考古学(松本肇氏)、絵馬や漂着物を中心とした民俗学(楠本正氏、石井忠氏)、土器の接合から文化財保存を考える保存科学(横田義章氏)、中世の文書から当大社の歩みを読み解く歴史学(河窪学芸員)、当大社神宝館の運営から神道博物館について考える博物館学



巨勢神社の絵馬を見学



芦屋釜の里を見学

(重住学芸員)などを設け、実務実習として刀剣の手入れ(藤川宣重氏)、拓本採りや資料の取り扱い(重住学芸員)などを例年実施している。今年さらには視野を広げるべく、宗像市の職員による文化財行政の講義、芦屋町立芦屋釜の里並びに芦屋歴史の里など他の博物館の見学も行った。

学生は実習を重ねながら、学芸員に必須の専門的、実務的知識だけでなく、当大社の信仰と宗像地域の歴史の意義深さ、環境や立場の違いによる様々な文

化財保護への取り組み方、後世への継承のために文化財の意義を地道に説いていく学芸員の使命等々、新たな認識を得ていたようである。次第に目的意識を高めて意欲的に取り組む学生たちを前に、少しでも有益な実習にできればと指導する側も力が入った。

日々習得した事に考えをめぐらせ学芸員の本質に迫ろうとする学生を見守りながら、学芸員の資質や責務について改めて考えさせられた十日間であった。

## 宗像大社

# 刀剣展開催

秋の恒例となりました刀剣展を次の日程で開催します。当社が収蔵する奉納刀を中心に鐔などの刀装具も展示します。皆様、是非お越し下さい。

会 期：平成19年10月28日(日)〜11月25日(日)  
時 間：午前9時〜午後4時半  
会 場：宗像大社神宝館1階展示室  
入館料：大人500円、大学・高校生300円、  
中・小学生200円  
※15名以上は100円引き

なお、展示作業のため会期の前後で休館します。

休館日：平成19年10月26日(金)、27日(土)

平成19年11月26日(月)〜29日(木)

(続)

# 浜の寄物

219

いしいただし



遇で、酒も与えられ、魚は必ず焼かれていた。居所も上官達のそばに設けられ

特に恩情を加えられた。



船内での火の取扱いは厳しく、煙草を吸う煙管(タバコをつめる部分)の頭に蓋をした。

船は三昼夜走行してパレンバン(インドネシア・スマトラ島南東部の商業都市)に錨をおろした。

船内では昼寝は禁じられぬが、夜は寝ることは許されず、夜間見廻りがきて、声がかげられると、百余人の者たちは、一斉に「寝ていない」と答えた。毎晩そうであった。帆走すること一三日、カシポラオと言う小島近くに帆をおろした。このカシポラオとは、オランダ人の靴に形が似ているために、命名された島名であった。もう一艘が遅れて見えないので、ここで待つことになった。

すると大船が現れた。フランス船で、これを見たオランダ船は慌てて戦闘準備をした

が、約一〇mほど近寄ってきたが、東の方へ去っていった。船内も孫太郎もほとと安堵した。船内で夜は寝させないのとは、夜間に敵船と遭遇するところがあるからである。遅れていたもう一艘も追付いた。

明和八年(一七七二)四月十三日、スラバヤ(インドネシア・ジャワ島東部北海岸の港市。大河プランタンの分流マス川の河口に位置する良港)へ。五月二日にはジャガタラ(インドネシア・ジャワ島北西部海岸・チリウン河口に位置する大港旧名バタビア)に錨をおろした。城壁・要塞、商館、住宅が建ち並んでいた。

に甲比丹につれられて、孫太郎は日本へ渡海する二艘の船の、大きい方の船に乗った。「大なる旗を風になびかせて、さながら小山の如く大きく見えた」(日本漂流譚)。この大船で日本へ帰えられる。孫太郎の喜びは如何許りであったろうか。

オランダ船は出港の合図に号砲を放つて、港を出ていった。

船室は甲比丹(船長)と上官八名。船師、医師は、いずれも船の中段にあり、船師のみ上



和蘭船

上官達の居所は豪華な飾りがほどこされ、天上板も種々の彩色、獅子や虎等も描かれてあった。毛氈も敷かれ、窓はピイドロ(ガラス)で、開かずして四方を見ることができない。

食事は上官達は別室で食

べ、音楽が奏された。乗員達は、朝夕の食事で、鈴を合図に、皆一堂で食べた。食事は巨大な銅釜で炊かれた。飲物は毎朝水を五合ばかりフラスコ(徳利状の容器)に入れて渡す。渡し終れば水槽に鍵をおろし、その外は少しも与えられない。食事のおかずは干魚を生で食べた。孫太郎は特別の待



# 第五五四回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日メ切

北九州市 戸畑区 田中 ハツセ

鴨居より還暦の姑が見下ろしぬ年忌に集ふ老いし我等を

評 高齢化した日本の縮図。私なども年に一、二〇〇人二、〇〇〇首を超える作品を見るが歌稿に書かれた年が六十歳台なら若いと感じる。そんな時代である。

福津市 若木台 野間 精一

庭に伐り来し神に幣を結へるをわが少女らが見守りてをり

評 改革のための神事だろうか、老いと少女の取合せがいい。ただ初句は「字余りにしながら伐ってきた神を庭に、庭にある神を伐ってきたか、不明である。伐りて来し」ではいかか。

北九州市 八幡西区 吉田 ウト子

植込みの小笹に揺らぐ木洩陽は神のやさしき遊びのごとし

評 下句の叙述は一首に深味を与え練達である。

福岡市 中央区 加野 シノブ

なき友の面影しのび仰ぐ空一線白き雲の掛橋

評 白い一筋の雲は作者と亡き友をつなぐ心の掛橋でもある。

宗像市 田久 巻 桔梗

大会のポスター街に貼りだせば受付前に応募歌とどく

評 大会は勿論宗像大社短歌大会の事である。大会事務局長の情熱とよろこびが伝わる。沢山の詠草が集まることを祈る。

宗像市 東旭ヶ丘 天野 玲子

入院を控へし夫は炎天に草を刈りをりせかるる如く

評 昔堅気で律儀なご主人であろう。早く本復されて欲しい。

福津市 中央 池浦 千鶴子

ケイタイの所在わからず電話して着信音をたよりにさがす

評 大会の選者の桜川さんも「さがしものばかりしてある引き出しに書類のしろい紙が騒げり」の一首がある。さがし物は、物を大切に人の証かも知れない。

福津市 星ヶ丘 佐々木 和彦

炎暑にて溶けるがごとき雲の峯真青き天の奥処に烟る

評 雄大な景である。詠はれているように雲の峰すら溶けるような今年の暑さであった。

宗像市 日の里 大和 美由紀

風通る稲荷の杜の籠り堂神に守られ蟻地獄棲む

評 蟻地獄はうす羽蟬の幼虫の巣。マリア像影したまへり蟻地獄「水原秋桜子の句を思い出した。

福津市 光陽台 香月 照子

同級の友と結ばれ年古れば二重映しの若き日の顔

評 「二重映し」のは、ご主人と作者の若い時の顔のことだろう。ご馳走さまと言いたい仲の良い夫婦像。

福岡市 南区 井田 有久衣

病棟で数珠を片手に讀美歌を老女は歌う孫と二人で

評 数珠と賛美歌、認知症の進んだ姿が物悲しい。

宗像市 田野 森 甲子

つゆ明けをそぞろ歩けばしろじろと胡麻の花咲く夏が来にけり

評 胡麻の白い花に夏を再確認をした感覚はすばらしい。

宗像市 ひかりヶ丘 清水 亜矢子

甲子園白球一つ追いかけて見る人達の心揺らがす

評 三句は「追うさまは」とする。今年には下馬評にもあがらなかった立の佐賀北高が優勝し感激と興奮は一層高まった。

うきは市 浮羽町 向 則正

津軽弁わざと使ひて「みちのく」を楽しく案内する人気のガイド

評 リップサービスと判ついても日常から解放された観光客には、それが嬉しいのである。

潮ひかる駅のホームに近々と

ざくろは大き口をひらけり

宮島の道を歩めばいづこにも

鹿の毛がとぶ秋日にひかり

下りてきて鹿二三頭遊びをり

潮の引きたる廻廊近く



# 第五二九回 俳句作品集

宗像市 東郷 田中 憲象  
母と子の日傘やさしき影つくる

宗像市 日の里 花田いつ枝  
漕ぎ出せり権のゆるやか霊送り

## 編集後記

紙面の通り出光興産の中堅社員研修が実施されました。小生、二十台前半から窓口となり、店主室教育研修時代末期、中堅社員研修の第一回目からお世話させていただいております。今回研修生の平均年齢は三十七歳。小生が今年三十一歳、段々と近づいてきました。若い時分は何も見えていなかったのですね。神社と会社は違うという考えが先行し、聞く耳もなかったように思えます。ところが最近の研修では、出光側から学ぶこと、一般企業の中堅社員が何をどうと求めているのか、会社側がどんなことを求めているのか、関心を寄せる自分があります。これが三十歳になることなのでしょう。前回の研修時は、人事部次長さんのこんな言葉が印象的でした。「V.S.O.P」洋酒ではなく、二十代でヴァイタリティー(活力)、三十代でスペシャリティー(専門性)、四十代でオリエンタリティー(獨創性・創造力)、五十代でパーソナリティー(個性)と年齢毎に積み重ねていくことが大切というものでした。そして今回、特に印象に残った言葉が、衰退していく組織として「傲慢・自己満・社内調整優先・変化に対する抵抗勢力が大きい」というものでした。いづれの言葉も組織の一員として、社会人として重く受け止めました。(M.O)

宗像大社社務所 発行所

〒811-3505 福岡県宗像市田島  
電話 0940-62-1311(代)  
発行人 葦津幹之  
編集人 大塚宗延  
制作 ゼネラルアサヒ  
印刷 ゼネラルアサヒ

定価1年送料共1,000円